

よしお  
秋山 仁雄 さん

○プロフィール

平成30年7月「クリケットタウン佐野創造プロジェクト」の地域価値創造マネージャーに就任。クリケットを通じたまちづくりを担う。任期は平成33年3月まで。



キラリ★  
話題の「ひと」

「クリケットの聖地」  
を目指して

「地域価値創造マネージャー」とは、市が平成28年度から進めている「クリケットタウン佐野創造プロジェクト」で中心的な役割を担う人材であり、秋山さんは応募者285人の中から選ばれました。

秋山さんは東京大学法学部卒業後、独立行政法人都市再生機構（UR）に入社。2001年〜2005年には佐野新都市開発を担当し、佐野プレミアムアウトレット誘致やバスターミナル設置に向けた高速バス事業者との交渉に携わった経験があります。マネージャー就任のため都市再生機構を退職し住居を佐野市内に移した後、7月から業務を開始しました。

秋山さんが考えるクリケットを通じたまちづくりは「クリケット」を全面にアピールすることではなく、まず地域を活性化していくという事です。田沼高校跡地の市国際クリケット場の整備・校舎の改修と同時に、街中にくつつかの企業と地域の人々が気軽に集まって交流できる場所づくりに取り組

みます。どちらも老若男女問わず多目的に利用ができるような設備にし、一つの場所で行えるような経験、体験ができ、誰もが行ってみたいと思える所にします。そこにクリケットを備えることでいつの間にか市民に広く知れわたり、それが身近なスポーツになっていく。そして秋山さんは、結果的にクリケットと街・人の歯車がかみ合って地域経済が活性化していく見通しを立てています。

秋山さんの20年、30年を見据えた計画は始まったばかりですが、「クリケットの聖地」と言えば佐野市！と、広く認知されるのはそう遠くないような気がします。

（市民記者 渡辺まさ代）



梶山地方創生担当大臣の佐野市国際クリケット場視察に同行する秋山さん(手前)

市長からの  
メッセージ



先月発生した西日本豪雨では、「大雨特別警報」が11府県に発令されるなど、想定を超える雨量による土砂崩れや河川の氾濫により、特に広島・岡山では多くの尊い人命が失われ、平成に入って最悪の被害となりました。亡くなられた方々のご冥福をお祈りしますとともにご遺族に深く哀悼の意を表します。

このような豪雨災害は、対岸の火事ではなく、佐野市でも起こりうるものです。本市でも豪雨災害への対応について防災訓練などを行っておりますが、この災害を教訓に、今一度、市民への適切な避難情報の伝達等の再確認を行いたいと思います。

さて、先月10日、本市出身者を中心として東京方面で活躍されている方々で構成される「在京佐野ふるさと会」総会が東京日本橋のホテルで開催されました。毎年、私も出席させてもらっていますが、島田勝久会長のもと、今年で創立30周年を迎え、今回出席された約40人の会員と一緒に節目を祝うことができました。会員の皆さんは、佐野を離れていても、ふるさと佐野市のことを常に気にかけてくれており、今後も本市と東京との交流の一翼を担っていただけるとの力強い言葉もいただき、とても心強く感じました。「在京佐野ふるさと会」会員の皆さんの益々のご活躍を祈念しております。

先月から、市内各地で夏祭りが開催されています。先月22日の「たぬまふるさと祭り」を皮切りに、今月11・12日が「さの秀郷まつり」、25・26日が「くずう原人まつり」と続きます。「暑さ日本一」の佐野から「ホット」な話題を発信していきたいと思っておりますので、皆さんも一緒に「熱い」気持ちで頑張りたいです。ただし水分補給は忘れずに。

岡部正英





## 天明鋳物と佐野の手仕事フェア

6月23・24日、道の駅どまんなかたぬまを会場に、市の多彩な手仕事文化を紹介する「天明鋳物と佐野の手仕事フェア」が開催されました。

伝統芸能・八木節で幕を開け、会場内には天明鋳物を核に節句人形など伝統工芸や、木工・押し花キャンドルなど新進の手工芸品の工房単位でブースが設けられ、作品の展示や紹介、実演や体験が行われました。市の手仕事文化を広くアピールするイベントとなりました。



「野州小桜」さんによる八木節



節句人形を鑑賞する来場者



鋳造の実演



手仕事を多くの方にご覧いただきました

## 天徳寺宝衍を考える

6月23日、ホテルサンルート佐野にて佐野学第2回目が開催され、天徳寺宝衍についての講演が行われました。宝衍は、聞きなれない方も多いかと思いますが、佐野にゆかりのある人物です。

宝衍は塚原卜伝の弟子となり武人の心得を納め、豊臣秀吉の側近となり、小田原城攻めの恩賞として、伏見城下の屋敷と、唐沢山城を与えられました。

佐野学を開催した佐野日本大学短期大学の川副令教授は、「市民が佐野市の過去の偉人を学び、現在の市民がつくる力(業績)により未来がどうなるか決まります」と語りました。講演に来場した方は過去の偉人を知るこの貴重な機会に、興味深く話に耳を傾けていました。

(市民記者 佐藤久夫)



講演をする出居博さん



多くの方が来場されました

農作業は天候に左右されるため、雨が降ったり強い風が吹いたりすると、田畑に出られなくなってしまう。かつて農業が盛んだったころ、悪天候であったり、あるいは冬の寒さで農作業ができなかつたとき、農家の人はよく隣の家へ出かけ、農作物の話や世間話をしながら楽しみました。

近所の家に向くと、まず出されるのがチャオケという軽い食べ物でした。これは茶を飲むときに添えて出す菓子や漬物のことです。チャオケは、茶づけなまが訛なまったものです。

旧田沼町の野上・三好地方では、茶菓子や漬物をオチャズツパイ、またはオチャズツベといいました。同町の飛駒・山形地方では、オチャズツベといいました。これらの方言の使用は昭和の初め頃までで、それ以降は消滅してしまい、今では一部の高齢者が知っているだけで、死語となってしまう。

「これはウチ(わたしの家)でコサエタ(作った)オチャズツベだけど、食ベラツセナ(食べてくださいな)。」

オチャズツパイは、「お茶」と「ソツパイ」が結びついたものです。ソツパイは、しょっぱいの変形形で、塩気がある意といわれています。食べ物の味は、塩加減によって決まるといわれているように、オチャズツパイは、塩加減がいいから味がよく、おいしいという意味です。ご飯のおかずのチャズツベも、味加減がよくおいしいという意味で、内容的にはオチャズツパイと同じです。

(市民記者 森下喜一)

佐野弁  
ばんてい

忘れられた古い方言

オチャズツパイ

茶に添えて出す茶菓子や漬物

今回の表紙 「さのクールアースデー2018」平成30年7月14日撮影